

IV 実践の考察と普及

1 実践1「キャリア発達 新たな一歩」に対する考察

本実践は、協力校の全学年全学級において実施した。導入では、授業者が「働く時に必要な力ってどんな力かな？」と問うことで、動画への関心を高めさせていた。カードワークでは、グループで台紙を指差し合って自分の考えを相手に伝え合いながら合意形成を図る姿が見られた。そして、ワークシートには、学年末までに身に付けたい力を「かふやみ20の力」の中から3項目を選び、その理由を記述していた。下表6は、生徒がどの力を選択していたかについて、学年別にまとめたものである。

表6 生徒が選択した「かふやみ20の力」 (n=1学年137、2学年110、3学年150、全体397)

4 領域	「かふやみ20の力」項目	1 学年		2 学年		3 学年		全体	
		選択 数	順位	選択 数	順位	選択 数	順位	総選 択数	順位
か か わ る 力	①多様な集団の中で他者とかかわる力	26	5	20	5	28	6	74	6
	②進んで考えや気持ちを伝え合う力	5	17	13	9	21	9	39	13
	③人や地域を大切に思う気持ちや感謝する心	22	8	11	10	18	12	51	9
	④協力する力	52	1	32	3	43	2	127	2
	⑤社会に参画し、社会を積極的に形成する力	5	17	4	20	3	20	12	20
ふ り 返 る 力	①行動を振り返り、改善につなげる力	33	4	26	4	37	4	96	4
	②自己の役割を理解する力	14	12	7	15	7	18	28	16
	③情報・助言を正しく理解し、自分を見つめる力	4	19	11	10	15	13	30	15
	④自分の良いところを見つめる力	17	11	8	14	9	17	34	14
や り ぬ く 力	①問題を発見できる力（問いを立てる力）	7	16	7	15	14	15	28	16
	②計画を実行する力	22	8	38	2	43	2	103	3
	③課題に対応した計画を立案する力	9	14	6	18	13	16	28	16
	④発想（想像）する力	24	6	16	7	15	13	55	7
	⑤間違いや他人との違いをおそれない力	20	10	11	10	19	11	50	10
	⑥最後までねばり強くやり通す力	41	2	40	1	57	1	138	1
み と お す 力	①将来を想像する力	36	3	20	5	31	5	87	5
	②自分の目標を設定する力	23	7	11	10	21	9	55	7
	③目標設定のために計画を立てる力	12	13	7	15	22	7	41	12
	④立てた目標を確認し次につなげる力	9	14	16	7	22	7	47	11
	⑤自ら主体的に判断しキャリアを形成していく力	4	19	5	19	5	19	14	19

この結果は、予想以上に興味深いデータを示している。まず、総選択数で1位の「や⑥：粘り強く」と2位の「か④：協力する」が県教育計画で打ち出された教育目標と合致するという点を特記しておく。次に、全体の上位5項目が4領域（かかわる力・ふり返る力・やりぬく力・みとおす力）に分散しているという点である。選択する際に指定したわけではないが、生徒たちは無意識ながらも「バランスよく4領域の力を伸ばしたい」という本能があると分析できる。さらに、各学年の上位5項目は、他学年でも上位であるという点である。これは、伸ばしたい力（項目）に共通性があると考えられ、教員側もこの力を意識した学級・学年・学校の目標を打ち出すことで、両者合意による学校づくりになると思われる。一方、下位となった項目にも全学年共通の傾向が見られた。「か⑤：社会に参画し、社会を積極的に形成する力」や「み⑤：自ら主体的にキャリアを形成していく力」である。様々な要因があると考えられるが、「参画」や「キャリアを形成」といった中学生期には馴染みの薄い用語となっていることも一因と捉える。選挙権年齢や成人年齢の引き下げに伴い、これまで以上に主権者教育の重要性が増している高等学校と比較するなど、今後、更なる考察を加えてみたい。

次に、各学年複数の生徒が選択した「かふやみ20の力」とその3項目を選んだ理由の記述（表7）より分析する。選んだ理由の記述（表7右枠）からは、「今の自分に足りない点」から3項目も選んでいる生徒が多いことが読み取れる。これまでの自分自身の言動を振り返って思考した結果と考えられる。このことは、自己肯定感を高めようという意志の表れとも捉えられる。一方で、「これからはこの力が求められるのでは？」と未来を意識した視点から選んでいる生徒もいる。これは、「みとおす力」が働いた結果と考えられる。これらより、過年度プロジェクト研究で課題の一つとして挙げられていた「自己肯定

感を高める取組」や「みとおす力やふり返る力を意識することが弱かった」ことに対して、本実践が効果的に作用したと推察する。

表7 学年末までに身に付けたい力（項目）とその力（項目）を選んだ理由（ワークシートへの記述）

学年等	選択した「かふやみ 20 の力」の3項目	その3項目を選んだ理由
1 学年	生徒 a や⑥：最後までねばり強くやり通す力 か④：協力する力 ふ①：行動を振り返り、改善つなげる力	最後までねばり強くやり通す力がないから。 クラス全体で協力したいから。 行動を振り返り、良くしていきたいから。
	生徒 b か②：進んで考えや気持ちを伝え合う力 ふ④：自分のよいところを見つめる力 み③：目標設定のために計画を立てる力	自分の考えをみんなと共有できるから。自分の良い点・悪い点がわかるから。今日のゴールに沿って大人になっても使える力だから
2 学年	生徒 c み④：立てた目標を確認し次につなげる力 ふ④：自分の良いところを見つめる力 や⑤：間違いや他人との違いをおそれない力	将来の目標に向けて計画や行動ができていないから。自分の悪いところをいっぱい見つけてしまうから。周りに合わせるだけではなくもっと自分を出せるようにしたいから。
	生徒 d か③：人や地域を大切に思う気持ち感謝する心 や⑥：最後までねばり強くやり通す力 や⑤：間違いや他人との違いをおそれない力	これからたくさんの人やモノと出会っていく中で感謝の心を忘れないようにしたいし、最後までやり抜くことが今はできず、間違いや違いをおそれず自分らしく生きたいから。
3 学年	生徒 e み①：将来を想像する力 や①：問題を発見できる力 か③：人や地域を大切に思う気持ち感謝する心	将来の夢や目標がまだ決まっていない。そのためにも、問題を発見できる力と感謝する心を身に付けたいから。
	生徒 f や⑥：最後までねばり強くやり通す力 み③：目標設定のために計画を立てる力 か②：進んで考えや気持ちを伝え合う力	受験のためにもやり遂げる力が必要！ 計画を立てないと実行できないから。 なかなか伝えられてないと思うから。

また、ワークシートの振り返りの欄には下表8の記述が見られた。本学習を終えて今の気持ちを、提示された14個の感情を表すキーワードの中から3個選び（本稿4頁、図4②参照）、その理由を記述する振り返り法である。「大変だ・わくわく・伝えたい」を選んだ生徒gからは、希望と高揚感が感じられる。また、「わかった・ありがたい・見つけた」を選んだ生徒hからは、自己理解が進んだことや本学習への感謝の気持ちが読み取れる。そして、「やりたい・うれしい・すっきり」を選んだ生徒iからは、行動する勇気の高まりが感じられる。いずれも「次の一歩」へ踏み出す気持ちとなっていることから本実践の題材名である「キャリア発達 新たな一歩」となったと捉える。なお、協力員からは、「これまでの振り返りに比べると無記入や一言の感想が減り全体的に記述量が増えた」という所感があった。ワークシートに気持ちを表すキーワードが列挙されていることが記述量の増加につながったと考える。また「生徒同士で相互比較もしやすそうだった」とワークシートのさらなる有用性を示唆する感想もあった。本実践以外の様々な振り返り活動においても応用するなど、その効能を考察することを推奨したい。

表8 ワークシートにおける振り返りの記述（学習後の気持ちを3個選び、その理由を記入する）

学年等	選んだ3個の気持ち	その3個の気持ちがした理由
1 学年 生徒 g	大変だ わくわく 伝えたい	キャリア発達のために色々やらないといけないから大変。でも新たな発見がありわくわくもしている。母に「こんなのをやった」と伝えたい。
2 学年 生徒 h	わかった ありがたい 見つけた	どんな力があるかや自分の足りない部分がいっぱいわかってありがたいなと思った。そして、自分が身に付けたい力を見つけることができた。
3 学年 生徒 i	やりたい うれしい すっきり	弱点を知りそれを3月までになくそうという気持ちが芽生えた。一歩踏み出すこと、やってみたいという気分がうれしいし、すっきりした。

さらに、本実践における考察のまとめとして、下表9の事後アンケートからも全ての設問に対して8割程度の肯定的な回答となっている。特に「動画によるグループワークは楽しかった」に対する肯定的な回答が高いことから、「かかわる力」のよさを体感する学習であったことが読み取れる（図8参照）。さらに、「中学校生活で身に付けたい力をイメージすることができた」という回答から、本実践がゴールとしていた「身に付けたい、伸ばしたい力を見つける！」が概ね達成できたと捉える。



図8 授業後の感想発表の様子

表9 「キャリア発達 新たな一歩」学習後のアンケート（n=452）

Q1：動画によるグループワークは楽しかったですか。（%）		Q2：「かふやみ」について理解は深まりましたか。（%）		Q3：中学校生活で身に付けたい力をイメージできましたか。（%）	
①とても楽しかった	33.9	①とても深まった	26.5	①イメージできた	29.3
②まあまあ楽しかった	53.1	②まあまあ深まった	52.7	②まあまあイメージできた	52.8
③あまり楽しくなかった	9.5	③あまり深まらなかった	14.6	③あまりイメージできなかった	12.6
④全く楽しくなかった	3.5	④全く深まらなかった	6.2	④全くイメージできなかった	5.3

2 実践2～12「各教科等の実践」に対する考察（協力員・検証授業対象生徒アンケートより）

実践1を踏まえ、各教科等の実践では「未来シート」や各教科特有の手立ても取り入れながら「学びに向かう力」の育成を目指す授業を行った。その結果については、各実践紹介における「◎実践の効果」の欄を参照していただきたい。本項では、協力校で実施した協力員・検証授業対象生徒事後アンケートから実践2～12に共通する効果や課題等を整理して示す。

検証授業対象生徒に実施した事後アンケートから、9割に近い生徒が単元目標と「かふやみ」を結び付けて自分の目標を設定することができた（表10-Q1）、単元目標を意識しながら学習に取り組むことができた（表10-Q2）と肯定的な回答をしている。これは、生徒が目標達成に向けて調整しながら学習に取り組んだと認識していると捉えられる。協力員からは、「未来シート」を用いたことで、生徒が本単元で身に付けたい力と連動させながら単元目標をより一層、意識することにつながったという考察があった。「未来シート」を用いたことによって、「みとおす力」が有効に機能し、主体的に学習に取り組もうという内発的動機付けへつながったと捉える。

また、8割以上の生徒が「かふやみ」を用いて目標設定することで、普段の授業が将来役立つということを意識できたと肯定的な回答をしている（表10-Q3）。この点について、そう捉える理由を追究する必要があるが、「未来シート」の効用もあると考えられる。例えば、学習後に顔マークで自己評価したり、さらに伸びたと思う力を選択したりするなどの振り返り活動によって、普段の授業が現在だけではなく未来において必要とされる力の育成につながったという自己認識となり、この結果に結び付いたと考えられる。一方、協力員からは「授業内容をこなすことに精一杯で、未来シートへの声掛けがあまりできなかった」「生徒の個人差もあるが、記入時間の確保が難しかった」という課題も浮き彫りとなった。しかしながら「最終的に提出してもらった未来シートを見ると、授業の様子を生徒なりに振り返り、あの場面ではこの力を付けていたと考えていることが読み取れた」「総合的に生きる力につながる取組だと思う」といった所感もあった。今後はICTを活用した記録方法を取り入れるなど、「未来シート」の活用方法について検討が必要と考える。

さらに、これらの所感に加え、複数の協力員はこの事後アンケート結果の要因として、パフォーマンス課題の設定による効用を挙げていた。「パフォーマンス課題の設定によって、生徒が学習課題を自分事として捉え、単元全体を通してその課題を意識しながら取り組む姿が見られた」とその有効性を述べている。粘り強さの原動力は夢中になれる気持ちであり、課題設定や問い創りはその要と言える。本実践終了後も他単元において、パフォーマンス課題による授業実践を継続・展開している協力員もいる。今後、「未来シート」とパフォーマンス課題の相乗作用について、更なる研究が期待できると考える。

表10 検証授業対象生徒への事後アンケート（n=693）

Q1：単元目標と「かふやみ」を結び付けて、自分の目標を設定することができましたか。（％）		Q2：単元の目標を意識しながら、学習に取り組むことができましたか。（％）		Q3：「かふやみ」で目標設定することで、普段の授業が将来役立つということを意識できましたか。（％）	
①とてもできた	49.3	①とても意識できた	47.0	①とても意識できた	43.9
②まあまあできた	37.8	②まあまあ意識できた	41.6	②まあまあ意識できた	38.7
③あまりできなかった	10.5	③あまり意識できなかった	9.5	③あまり意識できなかった	13.3
④全くできなかった	2.4	④全く意識できなかった	1.9	④全く意識できなかった	4.1

そして、下表11は協力員が本実践終了後に担当主事と共有した所感の一部である。キャリア教育の視点を取り入れた授業実践による手応えだけではなく、単元デザインの重要性を認識している様子が見える。また、自分自身の授業改善の契機となったことに加え、研究立案のタイミングや教科・学校全体としての関わり方について等の課題提起もあった。今後の研究に生かしていきたい。

表11 協力員の所感（実践2～12において掲載した以外の所感）

◇キャリアの視点を意識させて行動に結びつけることは有効だと思うので、「かふやみ20の力」を日頃から学級掲示しておくなどの周知をすれば、様々な場面における効果が期待できそうだった。
◇評価の観点ごとにそれぞれ何を頑張るべきか生徒と共有できた点が一番良かった。
◇動画など教育センターに提供してもらい、いろいろなアイデアも共有できたのでブラッシュアップにつながった。
◇細かく丁寧な単元計画、評価規準、指導案を作成してもらったので授業の流れがスムーズで、自分自身の資質向上にもつながったと思う。
◇急な取組だったが、学ぶ要点を絞ってくださったので、生徒たちも意欲的に学習できたと思う。課外活動・体験的な活動で成長するんだと改めて痛感した。
◇年度始まる前から計画していろいろ考えられれば、もっと動きやすかったのではと感じました。
◇研究授業後の教科会で主事も一緒に授業改善について共有できたことはよかったが、もっと教科全体で関われたらいろいろな角度から「学びに向かう力」の育成ができたと思う。

3 学校全体における変容(全教員・全生徒アンケートより)

本研究においては、各教科等における協力員を中心に授業改善に取り組んだ。協力員以外の教員とは校内研修や研究授業後の授業研究会といった限られた関わりであった。また、実践2～12における検証授業対象生徒も各教科等によって学年・学級に違いがある。しかしながら、協力校という位置付けを鑑み、学校全体における変容について全教員・全生徒への前後(6月・11月)アンケートを基に考察を加えることとする。

まず、「自分の考えを発表する場面では工夫して発表した(ていた)」(図9)に対して、生徒・教員双方とも6月と比較して増加した。中でも、協力員は全員が肯定的な回答となっており、本実践を通して自分の考えを相手に伝える「対話的な学び」に対する授業改善が図られたと捉える。

また、「話し合う活動により自分の考えを深めたり広げたりできていた」(図10)に対しても肯定的な回答に増加が見られた。この結果に呼応して多くの教員が学習活動の工夫をしていたと回答している(図11)。さらに、協力員は全員が肯定的回答をしている。R3学調課題に対して、学習活動の工夫がなされた結果と受け止める。実践2～12を参照し各学校において活用していただきたい。

一方で、図12の「課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる」において生徒の肯定的な回答は微増に留まった。学年別では、2・3学年は増加しているが、1学年は微減となっている。学年間の差について、3月末までの変容を追跡する必要があると考える。また、図12については、教員間でも協力員とその他教員の間に顕著な差異が見られた。これは、協力員が実践に取り入れた「未来シート」や各教科特有の手立てに有用性を感じた結果と捉える。今後、教科会等を活用しながら認識の共有を行い、「自ら考え取り組む生徒」の授業づくりに向けて切磋琢磨していくことを期待したい。

最後に、「学習した内容について振り返り次の学習に生かす」(図13) ことに関して、生徒の肯定的な回答は微増したが教員は相反する結果となった。生徒の認識に対して、教員側には「もっとできるのでは」という期待が反映された結果と考えられる。また、振り返りを「行う」だけでなく、振り返りの「意図」が共有されていたかという点も含めて、深掘りしていく必要があると考える。

以上の考察より、課題もあるが、本研究における取組は、学校全体として教員・生徒双方に効果があったと捉える。言い換えると、教師側に一定の授業改善が図られたということである。本研究が生徒だけではなく、教師にとっても「キャリア発達 新たな一歩」となったと総括するとともに、今後も学びに向かう力の育成に向けた授業づくり、単元デザインを例示・助言していきたい。

《 図9～図13の見方 》				
	生徒		教員	
	事前(6月)	事後(11月)	事前(6月)	事後(11月)
n	446	455	23	18
肯定的な回答			消極的な回答	
	とてもしていた			あまりしていなかった
	とてもできた			あまりできなかった
	まあまあしていた			全くしていなかった
	まあまあできた			全くできなかった



図9 自分の(生徒は)考えを発表する場面で、自分の考えが上手く伝わるよう工夫して発表していましたか

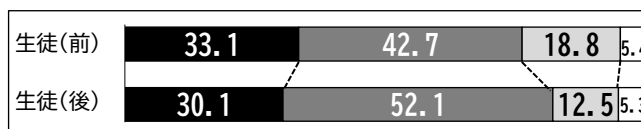


図10 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができましたか

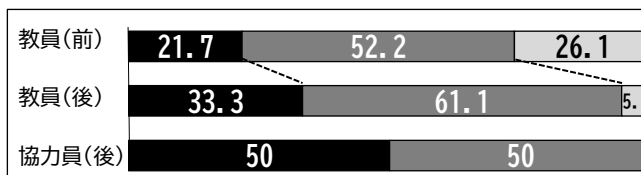


図11 生徒同士で話し合う場面では、生徒が自分の考えを深めたり、広げたりすることができるように、学習活動の工夫をしていましたか

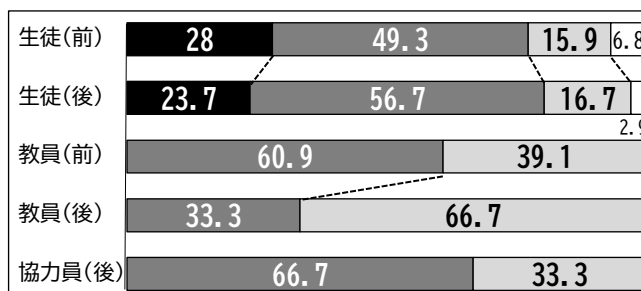


図12 授業では、課題の解決に向けて、(生徒は)自分で考え、自分から取り組んでいますか

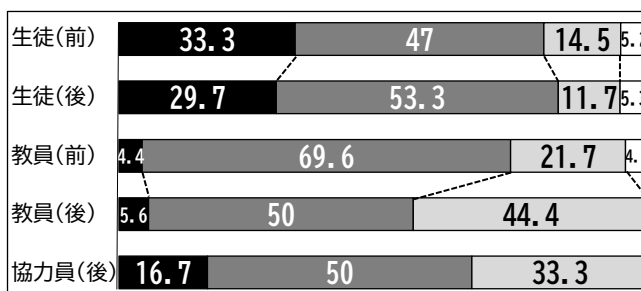


図13 自分(生徒)は学習した内容について、分かった点やよくわからなかった点を振り返ったり次の学習に生かしたりすることができましたか(できていますか)

4 実践1～12の普及

本実践の普及を図るために、フライヤーを作成し、県内各学校等へ配布することとした（次頁掲載）。表面には、児童生徒学習用動画「キャリア発達 新たな一歩」に関する紹介と、動画を含めた関連する各種データ・資料等のダウンロード用QRコードを掲載している。また、令和3年度のプロジェクト研究で作成した校内研修用動画「キャリア教育 はじめの一歩」についても案内した。

裏面には、各教科等における実践について、単元デザインのポイントとなるキーワードを明記した。そして、「未来シート」のテンプレートや実際の授業の様子の写真、作成・活用したワークシート等がダウンロードできるQRコードを掲載している。特に、本研究が中学校で行われた実践であることから、県内中学校には、各教科に1枚のフライヤーが届くように配布した。さらに、これらコンテンツを当教育センターWebページからも直接ダウンロードできるよう工夫した（図14）。今後、当教育センター主催の各種研修においても紹介していきたい。何より、各学校等において、これらが利活用されとともに、児童生徒の学びに向かう力の育成に役立つことを期待したい。



図14 本実践を紹介するWeb ページ

V まとめ

1 成果

- (1) 児童生徒学習用動画「キャリア発達 新たな一歩」を作成することができ、生徒にとって学年末までに身に付けたい、伸ばしたい力を見つけさせる取組となった。
- (2) 単元デザインに「未来シート」を取り入れたことで、キャリア教育の視点を位置付けた学習活動となり、単元目標を意識しながら主体的に学習に取り組もうとする内発的動機付けにつながった。
- (3) 中学校の各教科等における主体的に学習に取り組む態度を評価するまでの単元プランを例示することができ、教員に「単元をデザインする」という意識が高まり授業改善へとつながった。
- (4) キャリア教育の視点のみならず、パフォーマンス課題の設定やOPPシート等、各教科等特有の手立ても取り入れた授業づくりによって、学びに向かう力を育成する教育の充実が図られた。
- (5) 本研究で作成された動画や振り返りシート等の普及を図るため、QRコードを掲載したフライヤーを作成・配布することで各種成果物へのアクセス環境を整え、各学校での利活用を促進した。

2 課題と今後の展望

- (1) 本実践を他校種でも応用して活用するなど、本県児童生徒のキャリア発達を一段と促しながら学びに向かう力を育成する計画的・継続的な取組が必要である。
- (2) 本実践を展開する過程において、更なるICT活用場面を設定した授業を行うことで、児童生徒・教員双方にとって、どのような効果があるか検証する必要がある。
- (3) 本実践の手立てである「未来シート」の活用と、各教科等特有の手立てである「パフォーマンス課題」の相関性・相乗効果に着目した他単元や他校種等における取組を期待したい。

VI おわりに

本研究の遂行にあたり、様々な面から意見をくださり、最後まで協力していただいた北中城村立北中城中学校に深謝する。研究協力校あってこそ実現した研究である。とりわけ、照屋校長をはじめ、研究協力員として、本実践に対して精力的に取り組んでいただいた先生方の尽力に謝意を表すとともに、今後も本研究が発展的に活用されることを祈願する。

〈主な参考文献〉

- 沖縄県立総合教育センター 2021 「一人一人の良さを未来へつなぐキャリア教育の在り方」
 石井英真 鈴木秀幸 編著 2021 『ヤマ場をおさえる学習評価 中学校』図書文化
 『授業力&学級経営力 12月号』 2021 明治図書
 沖縄県教育委員会 2020 「沖縄県キャリア教育の基本方針」
 田中耕治 編著 2020 『学びを変える新しい学習評価 理論・実践編1 資質・能力の育成と新しい学習評価』ぎょうせい
 西岡加名恵 石井英真 編著 2019 『教科の深い学びを実現するパフォーマンス評価』日本標準